

1. 研究主題

共に学び、高め合う子どもの育成をめざして

～学級力向上に向けた実践をとおして～

2. 主題設定の理由

平成29年3月31日に告示された学習指導要領改訂に伴い、今年度から「特別の教科道徳」の全面実施、「中学年の外国語活動の導入」、「高学年の外国語科の導入」など、子どもたちの「生きる力」を育む教育の推進は、新たなステージへと移行する。そのような教育改革の中で、我々教師には「考える道徳」、「議論する道徳」への転換、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進と喫緊の課題が山積している。

そのような課題の解決を目指していく中で、やはり重要になってくるのが、共に学ぶ学級集団の在り方である。どんなに優れた教科指導を行おうとも、学びの土台となる学級集団が支持的学級風土に満ちていなければ、その指導は最大の効果を上げることができない。むしろ、これからの教育に求められる授業改善を行っていく上では、教師の明確な学級経営のもと、主体的に学び合える学級を創り上げていくことが先決であると言える。そしてそれを担任である教師一人に委ねるのではなく、学校全体として共通実践していくことが重要である。大量退職、大量採用に伴う指導技術の継承が大きな問題となっている本県の教育現場において、改めて学校全体で学級経営の重要性に目を向け、「学級力」を高める研究に取り組む意義は大きい。

本校では、その「学級力」をキーワードに、2年間の実践研究を積んできた。小規模校の特性を生かした様々な取組や学級経営の工夫などにより、支持的学級風土が高まり、子どもたちの主体的な学習態度も身についてきた。昨年12月に実施した学力調査（全年生対象）においては、複数の学年で国語科に課題は残ったものの、算数科では、ほとんどの学年で全国平均並み、もしくはそれ以上の正答率を挙げており、研究の成果が結果に結びついてきたと考える。また、生活指導面においても、子どもたちの生活態度は、年々落ち着きを増し、何事にも仲良く協力し合う姿が多く見られるようになった。そして、昨年度は、異学年交流の工夫にも力を入れ、異学年の絆を深めるとともに、よりよい自分になるうとする意識を高めることもできた。

そこで、本年度も引き続き「学級力向上に向けた実践」という観点から研究を深め、「共に学び、高め合う子どもの育成」という本研究の主題に迫っていきたい。

3. 研究仮説

教師が、子どもたちと共に学級力を高めていく学級経営を積極的に行い、支持的学級風土を培うことで、子どもは、課題解決に向けて主体的・協働的に学習を進めていく。また、異学年による積極的な交流を図ることで、自己肯定感や憧れの念を抱き、よりよい自分になりたいと進んで学ぶようになる。そのような主体的・協働的な学びの積み重ねによって、子どもは、学ぶ楽しさを味わい、「共に学び、高め合う子ども」に育つであろう。

4. 研究内容

本研究では、「学級力」を以下の4領域8項目で捉えている。

志々伎小学校が捉える「学級力」

1. がんばる力

- ①目標をたてる（もくひょうパワー）
- ②努力する（がんばりパワー）

2. 話し合う力

- ①話をつなげる（はつげんパワー）
- ②新たな考えをつくる（考えいっぱいパワー）

3. 高め合う力

- ①相手を受け入れる（なかよしパワー）
- ②助け合い、教え合う（助け合いパワー）
- ③生活のきまりを守る（きまりパワー）
- ④学習の約束を守る（やくそくパワー）

4. きまりや約束を守る力

※（ ）の言葉は、低学年向けに使用した言葉

以下の5つの内容を充実を図ることで、学級力向上に向けた実践を行い、研究主題に迫る。

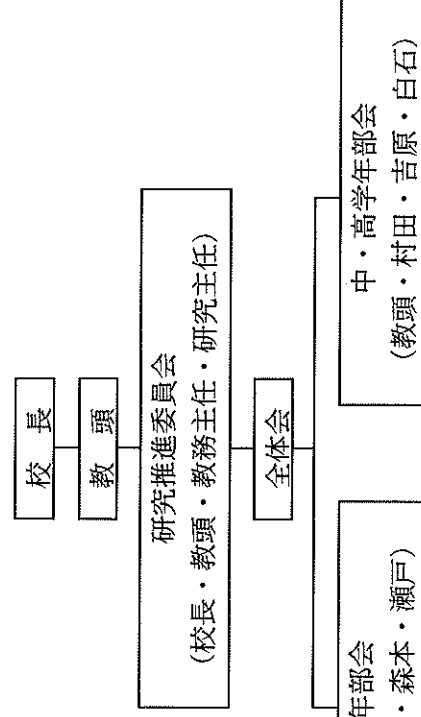
- 子どもたちと共に学級生活を振り返り、評価する手立ての工夫
 - ・ 学級力アンケートや振り返りカード
 - ・ 学級力明確化シートの活用
 - ・ 評価結果の提示方法 など
- 共に学ぼうとする意欲や学び合いの質を高める工夫
 - ・ 他者とかかわり合うことで解決できる学習課題や多様な考えが生まれる学習課題の設定
 - ・ 課題解決の見通しを持たせる工夫
 - ・ 教え合いを奨励し、自力解決が困難な児童へ積極的にかかわらせる指導
 - ・ スモールステップによる基礎的・基本的な内容を定着させる指導
 - ・ 発達段階や能力差に応じた聴き方・話し方の指導の工夫
 - ・ 自分の考えをわかりやすくまとめるノートや板書の書き方指導の工夫
 - ・ 意図的な学習形態（ペアや小グループ、異質集団や同質集団）や環境の整備（互いの考えを可視化できる道具やICTの活用など）
- 学習を振り返る場を設定し、教師による適切な評価や称賛及び児童相互の認め合いを促す手立て など
 - ・ 授業以外での具体的な取組の工夫
 - ・ 朝の会や帰りの会の工夫
 - ・ 係活動の工夫
 - ・ 教室環境の工夫
 - ・ 複式学級における異学年集団の活動の工夫
 - ・ 学級のみんなで考え、取り組める活動の工夫 など
- 志々伎っ子タイムの有効活用
 - ・ 基礎的学習内容の定着を図り、互いのがんばりや伸びを称賛し合う工夫
 - ・ 習熟度に応じて、活用問題などをペアや小グループで解決する取組
 - ・ 異学年と一緒に共通課題に挑戦する取組
 - ・ 弾力的な活用を行い、学級力を高めるための活動時間として活用 など
- 異学年交流の工夫
 - ・ 三二授業参観
 - ・ 三二合同授業
 - ・ 縦割り班活動の充実

5. 研究の方法

- 研究推進委員会（校長，教頭，教務主任，研究主任）で全体の企画・運営・調整を行い，全体会で共通理解を図り，研究を深める。
- 研究授業の視点を明らかにして，全学級で授業を行い，さらに相互評価を行うことにより，教師の授業力向上を図る。
- 学級力向上に向けた各担任の実践事例について交流する場を設定し，学級独自の取組の紹介やその成果と課題について情報交換を行ったり，学級が抱える問題を解決する手立てについて話し合ったりする。
- 校内研究の時間や研究授業に限らず，互いの取組や授業における学級力向上の手立てや成果について情報交換を行うなど，積極的に相互評価を行いながら研究を推進していく。
- 隔週の火曜日に実施する「子ども理解の時間」などで，各学級の子どもたちの実態について共通理解を図り，全職員で全ての子どもに積極的にかかわっていく。そして，各学級の学級経営に生かしてももらえるよう，子どものがんばりや変容に関する積極的な情報交換を行う。
- 学期末ごとに，児童の変容について話し合い，取組の成果と課題についてまとめ，次学期以降の共通実践事項を明確にして研究を推進していく。

6. 研究組織

(1) 組織



(2) 運営

- 研究推進委員会
研究推進委員会は，校長，教頭，教務主任，研究主任で構成し，研究の企画や提案などの検討及び各部の連携と調整を行う。
- 全体会
研究推進委員会で計画された案を検討し実践化のための共通理解を図る。また，授業研究・部会等を通して研究内容の深化を図る。
- 低学年部会・・・低学年（1，2年）の授業研究を行う。
- 中・高学年部会・・・中・高学年（3～6年）の授業研究を行う。

(3) 研修日

- 毎月第1・2・4木曜日の15:10～16:30（行事等により変更あり）
- 研究授業については，原則として校内研修のある木曜日に設定（時間は担任が指定する）し，午後の校内研修の時間で研究協議を行う。
- 研究推進委員会は，必要に応じて実施する。

7. 年間計画

月	日	形態	内容
4	19	全体会	研究内容・年間計画について
	26	全体会	学級生活を振り返り、評価する手立ての工夫について 県学力調査と全国学力学習状況調査の解答状況から見た自校の児童の課題について
5	24	全体会	特別教育支援について
6	7	全体会	指導案形式について 研究授業①の指導案検討
	21	全体会	研究授業①（第5・6学年）研究協議
7	28	個人	1学期の実践についての振り返り
	23	全体会	1学期の研究の反省 夏季休業中の研究計画と出張報告
8	9	全体会	学級力向上に向けた実践事例報告会
	21	全体会 部会	道徳の評価について（通知表所見例など） 教材研究・指導案検討
9	31	全体会	研究授業②の指導案検討，出張報告
	13	部会	研究授業②の準備，研究授業③の指導案検討
10	27	全体会	研究授業②（第 学年）・研究協議
	11	全体会	研究授業③（第 学年）・研究協議
11	25	全体会	研究授業④の指導案検討
	1	全体会	研究授業④（第 年）・研究協議
12	8	全体会	研究紀要の構成・様式・作成計画
	6	個人	2学期の実践についての振り返り
1	25	全体会	2学期の研究の反省，出張報告
	10	個人	研究紀要原稿作成
2	17	個人	学力調査の分析
	24	個人	学力向上プランの振り返り
3	31	個人	今年度の研究の振り返り
	7	個人	研究紀要原稿作成
4	21	個人	出張報告 ※研究紀要原稿提出
	28	全体会	今年度の研究の成果と課題
5	26	全体会	研究紀要製本，来年度の研究に向けて